



サルトル

壁 水いらず 部屋 奇妙な友情
出口なし アルトナの幽閉者 フォークナーの『サートリス』 フォークナーにおける時間性 『異邦人』解説
1947年における作家の状況 私と他者

伊吹武彦・白井浩司・佐藤朔・永戸多喜雄・生田耕作・渡辺明正・窪田啓作・白井健三郎・松浪信三郎 訳

世界文學大系

筑摩書房版

サルトル

LE MUR, INTIMITÉ, LA CHAMBRE, DRÔLE D'AMITIÉ (dans LES CHEMINS DE LA LIBERTÉ), HUIS CLOS, LES SÉQUESTRÉS D'ALTONA, SARTORIS PAR WILLIAM FAULKNER (de SITUATIONS, I), A PROPOS DE *LA BRUIT ET LA FUREUR*. LA TEMPORALITÉ CHEZ FAULKNER (de SITUATIONS, I), L'EXPLICATION DE *L'ÉT-RANGER* (de SITUATIONS, I), SITUATION DE L'ECRIVAIN EN 1947 (dans QU'EST-CE QUE LA LITTÉRATURE? de SITUATIONS, II), LA PREMIÈRE ATTITUDE ENVERS AUTRUI, DEUXIÈME ATTITUDE ENVERS AUTRUI (dans L'ÊTRE ET NÉANT)

Author ; JEAN-PAUL SARTRE

Originally copyrighted by EDITIONS GALLIMARD, Paris. Japanese translation rights arranged through the BUREAU DES COPYRIGHTS FRANÇAIS, Tokyo.

昭和38年4月5日発行

編者 佐藤 朔

発行者 古田 晁

印刷者 山元 正 宣

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京4123 電話(291)局7651

目次

壁	伊吹 武彦訳	5
水いらす	伊吹 武彦訳	16
部屋	白井 浩司訳	35
奇妙な友情	佐藤 朔訳	51
出口なし	伊吹 武彦訳	92
アルトナの幽閉者	永戸多喜雄訳	115
フォークナーの『サートリス』	生田 耕作訳	197
フォークナーにおける時間性	渡辺 明正訳	201
『異邦人』解説	窪田 啓作訳	206
一九四七年における作家の状況 (『文学とは何か』より)	白井健三郎訳	216
私と他者(『存在と無』より)	松浪信三郎訳	293

年譜	解説	サルトルもしくは存在の二重性
	佐藤	永井
	藤	井
	朔	且
		ニ
		イ
373	366	332

装
幀
庫
田
發

サ
ル
ト
ル

私たちは大きな白い部屋に押しこまれた。光線が痛くて眼がチカチカした。やがてテーブルが一つ、そのテーブルの向うに四人の男が見えた。平服の市民で、しきりに書類を見つめている。ほかの囚人たちは奥に詰め込まれていた。だからそこへ行くには部屋をずつと通って行かねばならなかった。知っている連中が幾人もおり、外国人にちがいないのもいた。私の前にいる二人は頭がまるく金髪だった。二人ともよく似ていた。フランス人らしい。小さいほうの男は始終ズボンを引っ張りあげていた。神経質なのだ。

こういう状態が三時間ちかくつづいた。私はぼつとして頭のなかがからっぽだった。もつとも部屋はよく暖まってむしろ気持がよかった。二十四時間、われわれは寒さにふるえ続けていたからだ。看守たちが囚人を一人ずつテーブルの前に連れて行く。するといはそれきりだ——しかし職業をきく。たいいはそれきりだ——しかし時々「おまえは軍需会社のサポータージュに参加したか」とか「九日の朝おまえはどこにいたか。何をしていたか」などと聞く。が答えは聞かず、少なくとも聞いている様子はなく、しば

らく黙ってじつと前のほうを見つめ、それから書類に何か書きはじめ。トムには国際部隊にはいつていたのはほんとうかと聞いた。トムの上衣のなかから証拠書類を発見されていたので否定するわけにはいかなかった。ファンには何も聞かなかったが、ファンが名を乗ったあと長いあいだ書きつづけた。

「無政府党員はぼくの兄のホセなんです」とファンはいった。「ホセがもうここにいないことはご存じでしょう。ぼくはその党にもはいってはおりません。政治に関係したことはないんです」彼らは答えなかった。ファンはなおも、「ぼくは何にもしませんでした。他人の尻ぬぐいは真っ平です」

唇はふるえていた。看守は彼を黙らせて連れ去った。今度は私の順番だ。

「おまえはパブロ・イビエタというんだな」

私はハイと答えた。

この男は書類を見て、

「ラモン・グリスはどこにいるか」といった。

「知りません」

「おまえはあの男を六日から十九日までおまえの家にかくまったらうろ」

「いいえ」

彼らはしばらく何か書き込んだ。それから看守たちが私を外へ出した。廊下にはトムとファンが二人の看守にはさまれて私を待っている。私たちは歩き出した。トムは看守の一人に「それで？」と聞いた。「何が？」と看守がいう。「あれは訊問ですか、判決ですか」「判決だ」と

看守。「じゃ私たちをどうするんです」看守は木で鼻をくくったように「宣告は監房で申し渡す」

われわれの監房というのは実は病院の地下室の一つだった。風が吹きこむのでおそろしく寒かった。私たちは一晩じゅうふるえつづけた。日中もたいしてよくはなかった。この五日間、

私は大司教館の穴倉にすごした。それは中世時代のものにながくない地下牢のようなところだった。囚人がたくさんいて場所がないので、所かまわずほうり込まれた。私はこの穴倉がべつに恋しくはなかった。寒さに悩まされることはなかったが、そこではひとりぼっちだった。ひとりぼっちだとしまいいには気持がいらいらする。この地下室には連れがいるのだ。ファンはめつたに口をきかない。彼はおびえきつていた。年がいかないから何にも口出しをしない。ところがトムは雄弁家でスペイン語をよく知っていた。地下室にはベンチが一つと藁蒲団が四つあった。看守たちに連れもどされるとわれわれは腰をおろして黙って待った。しばらくするとトムがいった。

「もう駄目だ」

「おれもそう思う。だがこの子には手をつけまい」と私はいった。

「何にも罪はないんだからな。闘士の弟、ただそれだけのことなんだ」とトムはいう。

私はファンを見た。聞こえない様子だ。トムは言葉をついで、「あいつらがサラゴスでどんなことをやってる

か知ってるかい。みんなを道路の上に寝かしてトラックでひくんだよ。逃げ出したモロッコの男がそういつていた。弾丸節約のためだとき」「ガソリン節約にはならないね」と私はいった。私はトムに腹が立った。そんな話はしないがいい。

「将校連がその道をぶらぶら歩くんた。そして監督するんだ。両手をポケットに突っ込んで煙草をふかしながら。ところでおまえはあいつらがひと思いにみんなをやっつけるとでも思うのかい。どうしまして。うめくままだにほうっておくのさ。時によると一時間もな。そのモロッコ人はいつてたよ。初めのときは、どが出そうだったと」

「ここではまさかそんなことはやるまい、ほんとうに弾がなければだ」と私はいった。
四つの明り窓と、天井の左のほうにあけた丸い口から日の光がはいってくる。この口は空に向かって開いていた。いつもは蓋をしてあるこの円い穴から、石炭をこの地下室へあけるのだ。穴のちょうど下のところに石炭の粉の山があった、病院のなかを暖めるためのものだったが、戦争のはじめから病人をほかへ移してしまつたので石炭は使わずにそのままになっていた。蓋をしめるのを忘れてあつたので、時にはその上に雨のかかることさえあつた。

トムはふるえだした。
「畜生、ふるえやがる。また始まりだ」
彼は立ち上がって体操をやりはじめた。身体を動かすことにシャツが開いて白い毛むくじや

らの胸がはだけた。彼はあおむけに寝て両足をあげ、鉄のように打ち合わす。大きな尻のふるえるのが見える。トムはがっかりしているが脂肪が多すぎる。鉄砲の玉か銃剣の先が今にこの柔らかい肉塊のなかへ、ちょうどバタの塊りのなかへはいりようにはいって行くのだと私は思った。それはこの男がやせている場合とはまた違つた気持を私に与えた。

別段寒いというのではないが、私は肩の感覚も両腕の感覚もなくなつていた。時々何か足りないものがあるような気がした。あたりに上衣を探しはじめ。がやがてきやつらが上衣を渡してはくれなかつたことをふと思ひ出す。何だかいやな気持だ。きやつらはわれわれの服をはいで兵隊にくれてやり、シャツしか残してはくれなかつた——それから入院患者が土用のさなかにはく麻のズボンと。しばらくすると、トムはまた立ち上がって息を切らせながら私のそばに腰かけた。

「暖まつたかい」
「暖まるもんかい。だが息が切れたよ」

晩の八時ごろ司令官がフアランへ党員二人をつれてはいって来た。手に一枚の紙切れを持っている。彼は看守に向かつて、
「あの三人は何という名だ」
「スタインボックとイビニタとミルバルであります」と看守はいう。
司令官は鼻眼鏡をかけて人名表を見た。
「スタインボック……スタインボック……これ

だ。おまえは死刑だ。あすの朝銃殺だ」
彼はなおも表を見て、
「ほかの二人も同様だ」といった。
「そんなことありません。ぼくにきぎつて」とフアンがいった。

司令官は驚いた様子で彼を眺めた。
「おまえは何という名だ」
「フアン・ミルバルです」
「じゃたしかに名前がある。おまえは死刑だ」
「ぼく、何にもしません」
司令官は肩をそびやかし、トムと私のほうを向いて、
「おまえたちはバスク人だろう」
「バスク人なんか誰もいませんよ」
彼はムツとしたらしい。

「何でもバスク人が三人いるという話だつた。探しまわつて時間をつぶすにはおよぶまい。じや何だね、むろん牧師を呼ぶつもりはないだらうな」
われわれは返事もしなかつた。彼はいった。
「ベルギーの医者が今すぐやって来る。おまえたちと一晩いっしょにすこす許可を得ているのだ」

彼は拳手の礼をして出て行つた。
「いわんこっちゃない。ひでえやつらだ」とトムがいった。
「うん、この子に対して何ということだ」私はいった。
正義感からそうはいつたものの私はこの子が好きではなかつた。顔がぎやしゃすぎるところ

へ恐怖と苦惱がすっかり人相を変え、眼鼻だちをひん曲げていた。三日前までは優男型の少年だった。それならそれで好きにもなるのだ。ところが今では年とった男娼のようで、たとえ釈放されてももう若返りはすまいと思われた。少しぐらいあわれんでやる気があつてもけつして悪いことではないが、私はあわれみが大ざらにだし、この子はむしろぞつとするほど不気味だった。もう何にも物はいわず土色になっていた。顔も手も土色だった。彼はまた腰をおろし眼をむいて床を見つめた。トムは気のいいやつでこの少年の腕を取ろうとしたが、少年はしかめ面をしてはげしく身をふり放した。「ほうっておくがいいさ、今にきつと泣き出すよ」と私はささやいた。トムはしかたなく私の言葉に従った。彼は少年を慰めたかったのだ。慰めることに気をとられて、自分のことを考える誘惑を感じなくなるからだ。ところがそれが私をいらさせた。私は今までその機会がなかったから、ついぞ死のことを思ったことがなかった。ところがいま機会はそこに来ている。死を思うほかすることはないのだ。

トムはしゃべりだした。

「おまえは人間をやつつけたことがあるかい」と私に聞く。私は答えなかった。彼は八月のはじめから六人殺したことを説明した。彼は今の境遇がどんなものかを悟っていない。いや悟ろうとしないことが私にはよくわかった。私自身まだ十分には実感できない。ひどく苦し

いのだらうかと考えてみたり、弾丸のことを

思ったり、やくような弾のあられが自分の肉体を貫くさまを想像したりした。そういうことは、みんなほんとうの問題をはずれている。しかし、私は平気だった。理解するには、まるまる一晩の余裕がある。しばらくするとトムは口をつぐんだ。横眼で見ると彼も土色になっている。悄然としている。「いよいよ始まりだ」と私は思った。ほとんど日は暮れてにぶい光が明り窓から射し込んでくる。そして石炭の山が空の下に大きな影をつくっている。天井の穴からはもう星影が一つ見えていた。今夜は晴れて冷たいだろう。

扉が開いて二人の看守がはいって来た。その後ろには灰褐色の制服を着た金髪の男がついてくる。彼はわれわれに会釈して、

「私は医者です。この苦しいまぎわに皆さんをお助けする許可を受けているのです」

感じのいい、上品な声だ。私は、

「ここへ何しに来られたんです」といった。

「何にでもお役に立ちましたしょう。この数時間が少しでも薬にすこせるように、できる限りのことをするつもりです」

「なぜ私たちのところへ来られたんですか。ほかのやつもいます。病院は満員ですぜ」

「ここへ派遣されたんですよ」とあいまにいう。「そうそう、煙草を吸いたいでしょうな。え？」とあわてて付け足した。「巻き煙草がありますよ。そして葉巻も」

彼はイギリス煙草とブーロスくれたが、われわれはことわった。私は相手の眼をにらみつ

けた。彼はれたらしい。私はいった。「あなたは同情心からここへ来たんじゃない。それに私はあなたを知ってますよ。私はとつつかまつた日、あなたが兵營の庭でフアシストといっしょにいるところを見ましたよ」

私はなお続けようとした。ところが突然われ

ながら意外なことが起こった。この医者の存在が急に私の興味をひかなくなつてしまつたのだ。いつもなら、一人の人間をこれぞと狙つたら放しっこないのだ。ところが物いいう気がまったくなくなつて、私は肩をそびやかしてそっぽを向いた。しばらくして頭をあげると彼は不思議そうに私を観察している。看守たちは藁床の上に腰かけていた。やせた大男のペドロは両の親指を回している。もう一人は眠るまいとして時々頭を振っていた。「明りはいりませんか」とペ

ドロが急に医者に向つた。医者はうなずいた。まるで木偶のように頭は鈍いが、まんざら悪い男ではなさそうだ。青い冷たい大きな眼で見ていると特に想像力の欠けているのが取のような気がした。ペドロは出て行き、石油ランプを持って帰つて来た。そしてランプをベンチの隅に置いた。よくも照らさないとはいへない。置いた。昨晩は真つ暗ななかにほうっておかれたのだから。私はランプが天井に描き出す円光をしばらくのあいだ見つめていた。吸い込まれるような気が持たつた。やがてふとわれに帰つた。円光は消えた。私は何か途方もなく重いものに押しつぶされたような感じがした。死の想いでもなく恐怖でもない。名のないものだった。頬がほて

り頭のなかが痛かった。

私は気を取り直して二人の相棒を見た。トムは顔を両手に埋めている。脂肪ぶりのした白い首筋しか見えない。フアン少年は目立っていちばんとり乱している。口をあけ鼻腔がピリピリふるえていた。医者は近よって、励ますように少年の肩に手をかけた。だが医者の眼は冷たかった。やがて私はこのベルギーの医者の手が陰険にフアンの腕を伝って手首までさがって行くのを見た。フアンは無関心に、されるとおりになっている。ベルギー人は何食わぬ顔で、少年の手首を三本の指でつまみ、同時にちよっと身を引いて私に背を向けるようにした。だが私はそり身になった。そうして医者が懐中時計を出し、少年の手首を放さずに、チラと時計を眺めるのを見た。しばらくすると彼は力の抜けた手を放し、壁のところへ行ってもたれ、何かすぐ書き留めておかねばならぬ重大事を思い出したように、ポケットから手帳を出して二、三行書きこんだ。

「畜生め」私はむかっとしてこう思った。「おれの脈はみせないぞ。もし見に来やがったらあの面をぶんなぐってやろう」

見には来なかったが、じっと私を見つめているのが感じられた。私は頭をあげてにらみ返した。彼は空々しい声で、

「ここはふるえるほど寒いとは思いませんか」

いかに寒そうだ。紫色になっている。

「寒かありませんよ」と私は答えた。彼は相変わらず厳しい眼で私をみつめている。

私はハッと気がついて顔に手をやった。汗びっしょりになっている。冬の真つ最中、風の吹き込むこの地下室にいて私は汗をかいているのだ。髪の毛をなげると汗のためにじっとりしている。と同時にシャツがぬれて肌にくっついていっているに気が付いた。少なくとも一時間前から汗を流しているながら、てんで感じなかったのだ。ところがベルギー人のやつ、これを見逃がしはしなかった。彼は汗の滴が私の頬を伝うのを見て考えたのだ。これはほとんど病理学的な恐怖状態の現われだ。そして自分は寒いのでから常態だと感じ、常態であることに誇りを感じているのだ。私は立ち上がって医者の顔をぶんなぐるうと思った。ところが手をあげかかると早くも屈辱感と憤怒は消えて、無関心にベンチの上へ倒れかかった。

私はハンカチで首をふくだけだった。こんどは汗が髪から首筋へ滴り落ちるのを感じたからだ。気が悪かった。もっとも私は間もなくハンカチでふくのもやめてしまった。ふいても無駄だ。ハンカチはもうしぼれるほどにぬれ、汗は相変わらず流れていたから。股からも汗が出て、しめったズボンがベンチにくっつく。

フアン少年は藪から棒に、

「あなたはお医者さまですね」

「そうだよ」とベルギー人はいった。

「苦しいのですか……長い間」

「何がさ……いや、そんなことはない」とベルギー人は優しい声で「すぐ済んでしまおう」

まるで有料患者を安心させているようだった。

「でもぼく……こんなこと聞きました……二度射ち直さなきゃならないことがよくあるって」「時にはある」とベルギー人は首を振って「はじめの一斉射撃がすっかり急所をはずれることがあるからね」

「するとまた弾をこめてもういっぺん狙い直すんですね」彼は考え込み、しゃがれた声で「暇がかかるかなあ!!」

彼は苦しむことがたまらなくこわかった。それほど思いつめていた。年齢のせいだ。私などはもうたいしてそのことは考えていなかった。汗の出るのは苦痛の恐怖ではなかったのだ。

私は立ち上がって粉石炭の積みであるほうへ歩いて行った。トムはハツとして憎々しげな視線を投げかけた。私の靴がきしむので、それではいらいらしているのだ。私は思った。おれもいつのように土色の顔をしているのだろうか。見るに彼も汗をかいていた。空はずばらしく晴れている。この暗い隅っこへは光はまるで射して来ない。頭さえあげれば大熊座の星が見える。だがそれはもう以前とは違うのだ。おととい、大司教館の地下牢から私は空の大きな切れはしを見ることができた。そうして一刻一刻が違った記憶を呼びさましてくれた。朝、空が澄んだほのかな青色をしているときには大西洋に沿った浜辺を想い、真昼ときには太陽を見て、ひしこオリヴを食べながらマンサニリアを飲んだセヴィリアのバーを思い出し、午後になって日がかげると闘技場の半分が日の光にきらきら光っているのに早や深いかげがあと半分

にひろがって行くのを見た。こうして地上のすべてのものが空に影を宿すのを見るのは苦しかった。ところが今は見ただけを見上げて、も空はもう何にも思ひ起こさせはしない。このほうがましだ。私はトムのをさへもどって腰をかけた。長い間がたった。

トムは低い声でしゃべりだした。しゃべりつづけていないと、自分の考えていることがよくわからないのだ。どうやら私に話しかけているらしいが、私のほうを見てはいない。こんなに土色になって汗をかいている私を見るのがきつとこわかったにちがいない。私たち二人は対のように似ていた。そしてお互いに対しては鏡以上にいやな存在だった。彼はこの世の人、ベルギー人を見つめていた。

「おまえにはわかるかい。おれにはわからない」

私も小声でしゃべりだした。私はベルギー人を見つめていた。

「何、どうしたのだ」

「おれにはわからないことがおそろうとしているんだ」

トムのまわりには異様な臭気がただよっていた。私は平生よりもおいに敏感になっているらしかった。私はあざけるように、

「今にわかるさ」

「どうもはつきりしないんだ」と執拗に彼はいう。「しっかりしていようと思う。だがせめて知っておきたいのだ……聞いてくれ。おれたち

は中庭へ引つ張られて行く、いいかね。それからおれたちの前にやつらが整列する。何人ぐらいいかなあ」

「さあ、五人から八人まで。それ以上じゃあるまい」

「よし、八人としておこう。『ねらえ』と号令がかかる。八つの小銃がこちをねらっているのが見える。おれはきつと壁の中へはいってしまいたい気がするだろう。おれは背中で力の限り壁を押す。壁はビクともしない。恐ろしい夢のなかのように。そういうことはよく想像できるのだ。ああ、どんなにはつきり想像できるのか！」

「そう。それはおれにも想像できるよ」

「きつといやな気持だろうな。あいつらは顔をめちやめちやにするために眼と口をねらうんだよ」と彼は憎々しそうに付け加えた。「おれはもう今から傷が痛むんだ。一時間ほど前から頭と首が痛んだ。ほんとうの痛みじゃない。もつとひどいやつだ。それはあすの朝かんじる痛みなんだ。だがそれからは？」

私は彼のいおうとすることがよくわかった。が、わかっているふうは見せたくはなかった。痛みといえは、私だって身体じゅうに痛みを感じていた。たくさん小さな切り傷のように。忘れるわけにはいかないが、私も彼とおなじでそれをたいしたことは思っていないかった。「それからはきみはお陀仏さ」と冷酷に私はいった。

彼は自分自身に向かってしゃべりだした。が、眼はベルギー人から放さなかつた。ベルギー人はろくに聞いている様子もない。私は彼が何をしに来たのか知っていた。われわれの考えていることなぞ彼に興味はない。彼はわれわれの身体を、生きながら死にあえぐ肉体を眺めるためにやって来たのだ。

「まるで悪夢のようだ」とトムがいう。「何かを考えようと思う。これだ、今にわかる、という気がいつもする。ところがそれがするりとすり抜け、逃げて行き、消えてしまう。それからあとは何もないのだと自分について聞かせる、だがそれがどういふことなのかわからない。ほとんどつかめそうになる時がある……がまた消えてしまう。おれはまたいろんな色や弾や銃の音を考えはじめる。誓つていうが、おれはマテリアリストだ。おれは気がいいにはいらない。だが、何かしら一つ変なものがあるのだ。おれは自分の死体を見ることができ、それはむづかしいことじゃない。だがその死体は、おれが、おれの眼で見ると、型はもう何にも見えなくなる。聞こえなくなる。そしてほかのやつらにはやっぱりこの世はつづいて……そこまで考えられなきやうそなんだ。ところがパブロ、人間はそういうことを考えるようにできてはいないんだよ。いいかい。おれは何かを一晚じゅう待ち明かしたことは前にもあった。だがこいつばかりはそれと違う。こいつは後ろから不意に襲ってくるのだよ、パブロ。そしておれたちにはどうしても心の用意ができてこないのだ」

「もうよせ、懺悔ざんげを聞いてくれる坊さんと呼ばるか」と私はいった。

彼は答えなかった。私は彼がともすると予言者ぶって、一本調子の声で私をパブロと呼びたがることに気付いていた。私はそれをいけ好かなく思っていた。しかしアイルランド人はみんなそうであるらしい。何だかこの男は小便可さい感じがした。結局私はトムとうまが合わなかったのだ。そして二人がいっしょに死ぬのだからといって、何もこれ以上彼と共鳴すべき理由は見あたらなかった。それとは事情のちがう連中もある。たとえばラモン・グリスがそうだが、トムとフアンをあいだにはさまれながら、私は孤独だった。もとも私には、そのほうがよかった。ラモンといっしょだったらいやにしんみりしてしまうかもしれない。ところが今私は恐ろしいほど冷酷だ。そしてあくまで冷酷で通したかった。

彼は相変あひまわらず、茫然ぼうぜん自失したようにぶつぶついい続けた。ものを考えないためにしゃべっているのにちがいがなかった。まるで摂護腺炎にかかった年寄りのように、小便のにおいがぶんぶんした。むろん私も彼と考えは同じで、彼のいうことはみな自分もいそうなことだった。死ぬことは自然じゃな。いざこれから死ぬとなればあの粉炭の山もベンチも、ベッドのきたない顔も、もう何もかも自然とは思えなかった。ただ私にはトムと同じことを考えるのがいやだったのだ。ところが私には一晩じゅう、五分間ぐらいの間を置いて、彼と私と同じことを考え

つつけ、同時に汗をかきふるえつづけるだろうということがわかつていた。私は彼を横眼で見た。すると始めて彼は異様の姿に見えた。顔に死相が浮かんでいるのだ。私は誇りを傷つけられた。私は二十四時間トムのそばに生活し、トムの話をききトムに話しかけ、二人の間に何の共通点もないことを知っていた。ところが今われわれは双生児のように似ているのだ。それも二人がいっしょに死ぬ、ただそれだけのためにトムは顔を見ずに私の手を取って、

「パブロ、おれは考えるんだ……人間がまったく無に帰してしまうというのはほんとうかどうか」と

私は手をそつと引いていった。
「足もとを見ろ、きたないやつだ」

彼の足もとには水がたまり、ズボンから滴がたれている。

「何だろう」彼は愕然がくぜんとしていった。

「小便をたれてるんだぞ」と私はいった。

「そんなことあるもんか。おれは小便なんかしていない。何にも感じない」と怒りたげる。

ベルギー人は近づいていた。そしてさも親切そうに、

「苦しいかね」と聞いた。

トムは答えなかった。ベルギー人は何もいわず小便のたまったのを眺めた。

「おれには何が何だかわからない。だがおれはこわいんじゃない。誓っていうがこわいんじゃない」と荒々しい調子でトムはいった。

ベルギー人は答えなかった。トムは立ち上

って隅っこへ小便をしに行き、前のボタンをはめながらもどつてくると、また腰をおろして黙りこんだ。ベルギー人はノートを取っている。

われわれはこの男を見つめていた。フアン少年もじつと見ていた。三人とも彼を見つめていた。彼は生きているのだからだ。彼は生きている人間の身振り、生きている人間の心配があった。生きて人間が当然ふるえるように、彼はこの地下室でふるえている。従順な、栄養のいい肉体を持っている。われわれはもうほとんど自分の肉体を感じてはいなかった——いずれにしても同じしかたでは感じていなかったのだ。私はズボンの股のあいだをさぐってみたかったが、その勇気がなかった。私はじつとベルギー人をながめた。両足をのばしてぶんぞり返り、筋肉を自由に支配している彼——あすのことを考えることのできる彼。ところがわれわれは血の気のない三つの影法師のようにここにいる。われわれは彼を見つめ、彼の生命を吸血鬼のように吸っている。

彼はとうとうフアン少年に近づいた。何か職業的な目的でこの子の首筋にさわろうとするのか、それとも憐憫の情に駆られたのか。もし憐れみによって行動したのだとすれば、その一晩のうち、後にもさきにもそれがただ一度のことだった。彼はフアン少年の頭や首をなでた。少年は相手から眼を放さず、されるままに任せていたが、やがて突然相手の手を握って、異様な顔付きでその手を見つめた。彼はベルギー人の手を両手に握っていた。この脂ぎった赤い手を

土色のやせ細った手が締めつけているところは、けっして気持ちのいいものではなかった。

私にはこれから何が起ころうとするのかよくわかっていた。トムにもわかっているにちがひなかった。しかしベルギー人はただあっけにとられて父親のように微笑している。しばらくすると少年は大きな赤い手を口のところへ持つて行って嘔みつこうとした。ベルギー人はさつと身を引き、よろめきながら壁のところまで後ずさりした。一瞬間、彼は愕然とわれわれを見つめた。われわれが自分とおなじ人間ではないことをとっさに理解したに相違ない。私は笑い出した。すると看守の一人は飛びあがった。もう一人は眠っていた。開いたままの眼が白かった。私は疲れと異常な興奮を感じていた。明け方になって起るること、死のことはもう考えたくない。これは無意味なことだ。むなししい言葉がからっぽなものに出くわすだけだ。ところが、ほかのことを考えようとすると、自分に向けられた銃身が見えてくる。私はおそらく二十べんも続けさまに自分の処刑を実感した。或る時など、もう事は終わったのだ、という気がした。少しの間、眠っていたにちがひない。やつらは私を壁のほうへ引きずって行く。私はじたばたする。許してくれという。私はハッとして眼をさましてベルギー人を見た。眠っているうちに大きな声を出しはしなかったかと心配したのだ。ところが彼は口髭をなでていた。何にも気付かなかったのだ。もしその気になったら、しばらくぐらゐ眠ることはできそうだ。二十四時間一睡

もせず、くたくたになつていたからだ。だが私は生きている二時間を無駄にしたくはなかった。やつらは明け方に私を起こしに来るだろう。私は寝ぼけてその後をついて行き、声もあげずにおさらばする。それは真つ平だ。私は動物のように死にたくない。私は理解したいのだ。それに私は悪夢にうなされるのが恐ろしかった。私は立ち上がつて歩き回つた。そして気を変え、ため自分の過去の生活を考えはじめた。いろんな思い出がごちゃごちゃに帰つて来る。いい思い出もあれば悪いのもある——いや少なくとも以前には私はそう呼んでいた。そこには人の顔もあれば、いろんな事件もあった。祭りのときヴァレンチアで、牛の角にやられた少年闘牛士の顔や、伯父の顔や、ラモン・グリスの顔が眼に浮かんだ。いろんな事件も思い出した。一九二六年、三カ月のあいだ失業していたこと、危うく飢え死にしそうになつたこと。グラナダでベンチの上に夜を明かしたことも思い出した。三日間飲まず食わずだった。私は気がいいようになっていた。死にたくなかったのだ。それを思うと微笑が浮かんだ。私はどんなに烈しく幸福を、女を、自由を追いかけていたことだろう。そしてそれは何のためだ。私はスペインを解放しようと思つてた。私はピ・イ・マルガルに心酔して無政府主義運動にはいり、民衆大会に出て演説した。私はまるで不死身でもあるように、すべてをまじめに考えていたのだ。

「なうそつぱちだ」と思った。私の生涯はもう終わったのだから何の価値もありはしない。自分はずな女どもといっしょに散歩したり、ふざけたりすることができたのだからと考へた。もしこんなふうな死ぬものとさえわかっていたら、小指一本動かすことではなかったのに。私の生涯は袋のように締め閉ざされて眼前にある。しかもその中身は中途半端のしろものだ。ふと私は自分の生涯を裁こうとした。いい一生だと自分について聞かせたくなつた。でも判断をくだすわけにはいかない。これは未完成品なのだ。私は永遠に向かつて手形を振り出すことに一生を費やしてきた。私は何にもわかつてはいなかったのだ。私には何の未練もない。未練の残りそうなものはたくさんある。マンサニリアの味や、夏、カデイクスの近くの小さい入江でした海水浴など。でも死はあらゆるものの魅力を奪つてしまった。

ベルギー人は急にえらいことを思いついた。「諸君、わしはきみらを愛している人たちにこつとづなり形見を届けてあげてもいいよ——軍政部の承認さえあれば……」

トムはうなるように、「誰もありません」

「私は何も答へなかつた。トムはしばらく待たから私を不思議そうに見つめて、

「コンチアには何にもこつとづはないかい」

「ないよ」

私はさも仲間うちらしいこの同情がいやだった。もっともゆうべコンチアのことを話したの

がいけなかつたので、あれはいわずにがまんすべきだつたのだ。しかしきのうまでは、あの女に五分でも会えるなら片腕を斧で切り落としてもいいくらいに思つていた。だからしゃべつてしまつたのだ。自分ではどうにもならなかつたのだ。しかし今ではもう会いたくもなく、いうことも何もない。腕を抱きしめる気さえない。私の肉体は土色になり汗が出てゐるから見るのもいやだ——ところがあの女の肉体も、いやでないとは断言できない。私の死んだことを聞いたらあの女はきつと泣くだらう。それにしても、死んでゆくのはこの私だ。私はあの女の優しい眼を思つた。あの女が私をじつと見つめてゐると、何かが向うから私のほうへ伝わつて来たものだ。しかし私はもうおしまいと思つた。たとえ今あの女が何を見ても、あの女の視線はあの女の眼のなかにとどまつて私までとはとどかないだらう、私は孤独だ。

トムも孤独だが私と同じように孤独ではない。彼は馬乗りになつて薄笑いを浮かべながら、じつとペンチを眺めていた。何かを聞いているようだ。彼は片手を出して用心深く木にさわつた。何かを壊すのを恐れるかのように。それからつと手を引いて身ぶるひした。もし私がトムだつたらペンチにさわつて興がるようなことはしなかつたらう。これもやっぱりアイルランド人のお芝居だ。しかし私も物が変に見えることは感じていた。物はいつともより影うすれ、密度が稀薄になつていた。ペンチやランプや粉炭の山を見ただけで、自分がこれから死ぬのだというこ

とが感じられた。むろん死をはつきり見るわけにはいれないが、私の死ぬことは到るところ物の上に見えた。瀕死の病人の枕もとで小声に話す人たちのように物が退いて、そつと遠くに控えてゐるそのやりのなかに。トムがいまベンチの上にふれたのは彼自身の死だつたのだ。

私のいまの状態では、たとえ無事に家へ歸つてよい、いのちは助けてやると知らされても平気だらう。何時間か待つのも何年か待つのも同じことだ。不滅であるという錯覚を失つてしまつた上は、私は何にも執着はなかつた。或る意味では落ち着いてゐた。だがそれは身の毛のよだつ落ち着きだつた——私の肉体を思うと、私の肉体。私は肉体の眼で見、肉体の耳で聞いている。だがそれはもう私ではない。私の肉体はひとりで汗をかき、ひとりでふるえてゐる。私にはもう覚えのない肉体だ。まるで他人の肉体のように、それがどうなつていくのかを知るには、それにふれ、それを注視しなければならぬ。時々私はまだ肉体を感じた。急降下する飛行機に乗つてゐる時のように、すべりおちるような、転げ落ちるような感じがした。また心臓の鼓動するのも感じられた。だがそれでは安心ならなかつた。私の肉体から来るすべてのものは、いやにうさんくさいのだ。たいていおとぎは肉体は黙つておとなしくしてゐる。私にはもう、一種の重さのようなもの、私に對立する醜惡な存在しか感じない。巨大な蛆虫になつてゐるような印象だ。私はふとズボンにさわつてそれがぬれてゐるのを感じた。汗にぬれたの

か小便かわからない。だが用心に、石炭を積んだところへ小便をしに行つた。

ベルギー人は時計を出して見た。「三時半だ」

畜生！ こいつ、わざと時間を知らせやがつたんだ。トムは飛び上がった。われわれはまだ時のたつのに気付いてゐなかつた。夜の闇は不定形のくらしい塊りのようにわれわれを取り巻いてゐた。私は夜のはじまつたことさえおぼえてはいなかつた。

ファン少年はわめき出した。両手をねじ合せて哀願するように、

「死にたくない、死にたくない」

彼は両手をあげて地下室の端まで走つて行き、薬床の一つにたおれてすすり泣いた。トムはどんよりした眼で見つてゐたが、もう慰めてやる気さえなかつた。事実それには及ばなかつた。少年はわれわれより騒々しい。だがわれわれほどはまいつてゐない。彼は熱の力で病氣と闘う病人のようなものだ。熱さえなくなつた時こそはるかにたいへんなのだ。

彼は泣いてゐた。彼は自分自身がいとしいのだ。死のことを考へてゐるのではない。私も一瞬間、ただいっぺんだけ泣きたくなつた。自分がいとしくて泣きたくなつた。だが実際にはその反対のことが起こつた。私は少年に一瞥を投げ、しゃくり上げる彼のやせこけた肩を見て、たちまち冷酷な自分を感じた。自分は他人をも自分自身をもあわれむことはできない。きれいに死にたい、私は心にそういつた。

トムは立ち上がって、あの円い穴のちようど下のとこへ行き、じつと日の出を待ちはじめた。ところが私はがんばった。きれいに死にたい。ただそれだけ考えていた。ところが例の医者が時間を知らせてくれた時から、私は過ぎて行く時を、一滴一滴と流れてゆく時を、底のほうに感じていた。

まだ暗いうちにトムの声を聞いた。

「聞こえるかい」

「うむ」

やつらが中庭を歩いている。

「何をしに来るんだらう。まさか闇の中でうてもしまいに」

やがて何にも聞こえなくなった。私はトムに、「ほら夜明けだよ」といった。

ペドロはあくびをしながら立ち上がり、ランブを消しに来た。そして相棒に、

「ひでえ寒さだ」といった。

地下室はすっかり薄明るくなっていた。遠くに銃声が聞こえた。

「始まったな」と私はトムにいった。「後ろの庭でやってるにちがいない」

トムは医者に煙草を一本くれと頼んだ。しかし私はほしくなかった。煙草もアルコールもほしくなかった。その時からやつらはのべつにうちつづけた。

「わかるかい」とトムはいった。

そしてまだ何かいい足そうとしたが、口をつぐんで扉をじつと見つめていた。扉は開いて二人の副官が四人の兵士を連れてはいって来た。

トムは煙草を取り落とした。

「スタインボックは？」

トムは答えなかった。でペドロが彼を指した。

「ファン・ミルバルは？」

「藪床の上にいるやつです」

「立て」と副官はいった。

ファンは動かなかった。二人の兵士が腋の下を持って立ち上がらせた。しかし放すとすぐまた倒れてしまう。

兵士たちはためらった。

「最初のやつは弱っちゃいない、おまえら二人で連れて行け、向うへ行つて何とかしよう」副官はそういってトムのほうを向いた。

「さあ、来い」

トムは二人の兵士にはさまれて出て行った。

もう二人の兵士はその後について行った。腋の下と脛をもつて少年を運んでゆく。少年は気絶しているのではない。眼を大きく開いている。そして涙が頬を伝って流れている。

私が出ようとすると副官はとめた。

「おまえはイビエタだね」

「ええ」

「おまえはここに待っておれ。今すぐに呼びに来る」

皆は出て行った。ベルギー人と二人の番卒も出て行って、私はひとり残された。どういふことになったのか、さっぱりわからないが、ひどい思いをやつてもらったほうがよかった。ほとんど規則的な間をおいて一斉射撃の音が聞こえる。その度ごとに私は戦慄した。だが私は歯を食い

しばり両手をポケットに突っ込んでいた。どこまでも取り乱したくなかったのだ。

一時間ほどたつて私を呼びに来た。そうして葉巻の匂いのする二階の小さな一室へ連れて行

った。この部屋の暖かさは息がつかまるほどに感じられた。そこには二人の将校が肘掛け椅子に腰をおろし、書類を膝に乗せて煙草をすっていた。

「おまえの名はイビエタだね」

「はい」

「ラモン・グリスはどこにいる」

「知りません」

私に訊問しているのは小柄の太った男だった。鼻眼鏡の奥の眼がすごい。

「こつちへ来い」

私は近よつた。彼は立ち上がり、私を地の下にめり込ませでもするようにならみつけながら私の両腕をひつつかんだ。と同時に力まかせに私の二つの腕をひねり上げた。それは私を苦しませるためではなく、私を威圧しようという大芝居なのだ。彼はまた私の顔にくさい息をふき

かけるのも必要だと思つたらしい。私たちはしばらくそうしていた。私はむしろ笑いたくない。死んでゆく人間を威圧するには、それぐらいではまだまだ足りない。てんでこたえないのだ。彼は私を烈しく突き飛ばしてまた腰かけた。

「おまえのいのちと、あいつのいのちの取り換えつこだ。あいつのありかをいったら、いのちだけは助けてやる」

鞭をもち長靴をはいて、美しく飾り立てたこ

の二人の男も、やっぱりやがて死ぬ人間なのだ。私よりは少しおそいかもしれぬがたいしておそくはない。ところがやつらは書類のなかに懸命になって人の名前を探し、投獄したり殺したりするためにほかの人間を追いかけ、スペインの将来について、またその他の問題について意見を持っている。やつらのけちくさい活動は私には不愉快な、ばかばかしいものに思われた。私にはどうしてもやつらの気持になって考えることができず、やつらが気ちがいのように思えるのだった。

太った小男は長靴を履で打ちながら、相変わらず私を見つめている。彼のすることなすことは敏捷な猛猛な野獸を髣髴させるようにわざと仕組まれているのだった。

「どうだ、わかったか」

「グリスがどこにいるか知りません。マドリードにいるものとばかり思っていました」

もう一人の将校は無精げに血の気のない手をあげた。この無精らしさも曰くがあるのだ。私はやつらのからくりをすっかり見抜くことができた。そういうことをおもしろいと考える人間のものにはあきれてしまう。

「十五分間猶予するからよく考えろ」と彼はゆっくりいった。

「この男を布類の入れ場へ連れて行け。そして十五分たったらまた連れて来い。あくまで拒んだらすぐに処刑だ」

やつらはちゃんと心得てやっている。私は一晩を待ち明かした。それからやつらはトムとフ

アンを銃殺するあいだ私を地下室で一時間も待たせた。さて今度は布類の入れ場に閉じこめるのだ。やつらはきのうから筋書を書いておいたにちがいない。やつらは人間の神経というものはしまいいには摩り切れてしまうものだと考えたのだ。そうしておいて私をとちめるつもりだったのだ。

がおおいにくさまだ。布類の入れ場へ行くと私はぐったりしたので腰掛けに腰をおろした。そして考えはじめた。やつらの提議について考えたのではない。むしろ私はグリスのありかを知っている。あの男は町から四キロほどの従兄弟の家に隠れているのだ。また私は拷問にかけられないかぎり（やつらはそんなことは考えていない様子だ）あの男の隠れ家を明かしはしない、ということも自分で知っている。そういうことは、すっかり段取りが済んでいるのだから私には全然興味はない。ただ私は自分の行動の理由を知りたいのだ。私はグリスをやつらに渡すくらいなら死んだほうがましだと思っている。それはなぜだろう。私はもうラモン・グリスが好きじゃない。あの男に対する私の友情は夜明け少し前、コンチアへの愛といっしょに、生きる欲望といっしょに死んでしまった。なるほど私にはあの男をやっぱり尊敬している。あれはがらばり屋だ。だが私が身代わりに死のうといものはそんなことのためではない。あの男のいのちは私のいのち以上に価値なんかない。誰のいのちだって価値はないのだ。一人の人間を壁に立たせ、そいつが死ぬまでうちまぐる。

それが私だろうとグリスだろうとほかの人間だろうと同じことだ。あの男がスペインのために私より役に立つことはよくわかっている。だが私にはスペインも無政府主義もよくそくらえだ。何もかもくだらなくなってしまう。ところが私はここに生きている。グリスを渡せばこの身は助かる。だのにそれを私は拒絶しているのだ。私はそれをむしろこっけいだと思った。これは意地なんだ。私は思った。

「ずいぶん頑固だなあ……」そう思うと変に愉快なものが胸いっぱいになった。

やつらは私を呼びに来た。そして二人の将校のところへ連れて行った。鼠が一匹足もとから飛び出した。それが私にはおもしろかった。私は一人のフアランへ党員のほうを向いていった。「鼠が見えましたか」

彼は返事しなかった。仏頂面でいやにまじめくさっていた。私は笑いたくなくなったがいったん笑いだしたらとまらないような気がしてがまんした。このフアランへ黨員は口髭をはやしていった。私はまたいつてやった。

「髭を切りなよ」

生きているあいだ毛を顔じゅうにはびこらせるといのがおかしかった。彼は自信なげに私を蹴った。それで私は口をつぐんだ。「どうだ、考えてみたか」と太った将校がいった。

私は非常に珍しい昆虫のように、物珍しげにやつらをながめた。そしていった。

「あの男のゆくえは知っています。あの男は墓